

編集後記

「寛永庚午七年五月十三日晴。朝より暑気殊の外強し。巳の刻、御世嗣^{およつぎ}・辯之助様、国表より届いたる白川の初鮎、老中土井大炊頭様に御献上の為、神田橋上屋敷に立向はる。他に記すへき御政道向きの事なし……」①

一九六二年に封切られた橋本忍脚本・小林正樹監督作品、映画『切腹』の冒頭のナレーションである。舞台となる「神田橋上屋敷」とは、彦根藩井伊家の江戸屋敷である。

映画は井伊家を象徴する赤備えの甲冑一領のクローズ・アップから始まる。次いで『井伊家覚書』なる書物が映し出される。①はこの覚書からの引用である。「赤備え」と書いたが、じつは映画は白黒なので色はわからない。『井伊家覚書』が大写しにされることで、井伊家の赤備えがイメージされ甲冑の漆黒の部分は、真紅として頭のなかで着色される。

この覚書は井伊家老斎藤勘解由の筆

による、という設定である。寛永七年（一六三〇）といえば井伊家当主は直孝の治世か。直孝は書院蕃頭・大番頭・伏見城蕃……と、武勇を誇る井伊家らしく、番方の出世街道を進み大老となる。

『切腹』という凄惨な事件を思わせる映画は、井伊家の日常を叙述する『井伊家覚書』から始まるのである。

※ ※ ※

「日常」とは何か。日常の対極は非日常であり、非日常の極北は天変地異と戦争であろう。したがって、日常は平時や平和と重なる。坂本義和は戦時と平時のあいだに「時間」の質の差異をみる（以下、坂本「中立日本の防衛構想」『地球時代の国際政治』所収参照）。

「平時には、時間はちようど時計の針が一定の位置に戻ってくるように、ある周期性をもつて反復し循環する。一日に一回出勤し、一週に一回休日を楽しみ、一月に一回給料を受取り、年に一度雑煮を祝うといった具合に「時間」が構成され

る」。つまり、日常の時間とは長針と短針のある時計のごとく円環性をもっている。円環が閉じて一日が終わる。それがそれが繰り返すのが日常の時間である。

で、その円環が閉じないとき、たとえば「毎朝夫が職場に、子供が学校に出かける時、出て行く者も送る主婦も、出た者が夕刻には帰ってくるという予期の中に生きているのがわれわれの日常だ。そしてもしこの予定通りに帰ってこない時、誰しもが「事故」を連想する」ということになるわけだ。つまり、日常は平穩無事……ということになるのだが、この映画では二つの日常の円環が激しく激突する。

一つの円環は、井伊家の日常である。

それは覚書①の「他に記すへき御政道向きの事なし」という、判で押したように繰り返す、平々凡々なことがらは省略する、という一文が象徴する。

この閉じようとする円環に「待った！」をかける如く上屋敷の門前に横合いから

登場するのが、仲代達矢が演じる芸州福島家浪人・津雲半四郎である。

①につづき、その背中に「ただ申の刻に到り、元芸州の広島福島家の浪人と称する者、表玄関に訪ね来たる」(②)というナレーションが重ねられる。記すべきほどの事はなし、と締めくくったあとに、「ただ」と、さりげなく挿入されるこのナレーションには、かすかな違和感を覚える。

半四郎は玄関に立つと、玄関蕃に姓名を告げ、用件を述べる。いわく、福島家が改易され浪人し、仕官すべく江戸にでてきたが、それが叶わず生活は逼迫、このまま無為に生き恥をさらすより、潔く切腹したい。ついては、玄関先を貸してほしい、と願い出る。

『切腹』の原作は滝口康彦の短編小説「異聞浪人記」である(短編集『一命』に収録)。その「異聞浪人記」の元ネタは『明良洪範』。『明良洪範』は、江戸千駄ヶ谷聖輪寺の住持増誉による二五巻の書で、

内容は真偽さだかならぬ將軍・大名・武士たちの逸話集である。

『明良洪範』の「浪人合力の事」には「其頃は浪人甚だ多くして、諸侯方へまで合力を乞に出たり、或日井伊掃部頭直澄居屋敷へ、浪士一人来りて、永々浪人致し既に渴命に及び候間、切腹仕度候、介錯の士を仰付られ下さるべしと云、直澄聞れて其浪士は吾家に抱へられ度き望みか、或は大分の合力でも受けたき望みか、内心に在んなれど、左様言はずして、わざと切腹致たくと言ふならん、其言ふ所に任せ、切腹さすべしと云、是に因て食事をさせ切腹致させけるあとで直澄後悔しけると也」とある。

この非常に短い断片のような史料を滝口が想像して短編に仕上げ、さらにそれを橋本忍と小林正樹が二時間一分の脚本・映画に仕立てた。

『明良洪範』のいう「其頃」とは、元和から寛永にかけて、松平忠輝、福島正則、田中吉政、本多正純、最上義俊、蒲生秀

郷など、改易、減封があいつぎ、浪人の群が天下に溢れていたころである。このころ大名家の玄関先を借りて切腹を望む浪人が現れ、召し抱えられたり、金子を与えられた者がでた。だが、井伊家では切腹志願者を強請り・たかりの類とみて、切腹させたという。

『切腹』で井伊家を訪れたのは、半四郎が最初ではない。玄関蕃が半四郎の件を家老の勘解由に告げると、勘解由は「また来おったか」とぼつり呟く。

※ ※ ※

大きな事件が起これば、もちろん関心を惹くが、やがて日常に回歸して忘れ去られていく……。覚書に着目し、その日常性のなかに事件性を嗅ぎ取ろうとしたのが評論家の江藤文夫である。

新聞記事の事件と事件のあいだにはさまった、小さな出来事がふと気になることがある。なぜ、気になるのか、自分でもわからない。わからないま「何故自分がこの小記事に惹かれたのか、何故この

報道に疑念を抱いたのか、目は考えはじめる」という。これを江藤は「日常における《歴史》の発見」と呼んだ（江藤・藤久ミネ編『歴史を見る目』）。

じつは、原作には『井伊家覚書』なるものは登場しない。橋本が考え出した架空の史料である。橋本はこの映画の着想をカンスで得た。それは侍精神の美化ではなかった。

橋本は、黒澤明監督『七人の侍』（一九五四年）の脚本も担当した。

『七人の侍』は当初の構想では、われわれが知るような構^{プロット}成とは全くちがっていた。当初の『七人の侍』は黒澤・橋本の間で、次のように構想されていたという（前掲『歴史を見る目』）。

ある侍が朝起きて、まず顔を洗い、そして祖先の霊に礼拝する。次に、月代を剃り、登城する。が、仕事にミスがあり、自宅に帰ったあと、庭で腹を切る……。ところが、兩人はここでハタと行き詰まってしまった。月代を剃るというが、

自分が剃るのか、家人がやるのか。カミソリはどういうもので、どう動かすのか。城勤めは何をするのか。弁当持参なのか、それとも給食のようなものが出たのか。そもそも、何をたべていたのか……。

橋本は「何年何月にこういうことがあったという事件の記録はあっても、生活の記録がない」と述べている。時代劇を書いていて痛感するのは生活の記録・史料が少ないことだという。記録・史料によって鮮明な像が浮かんでこないという。ナリオが書けないという。

※ ※ ※

井伊家は直孝の代に加増を重ね、譜代筆頭の石高三〇万石となり、家格は三万石格となる。覚書は三〇万石の大名の日常を象徴する。『切腹』は当初、サブタイトルとして『井伊家覚書』とあり、最終段階で取ったという。それほど、この映画にとつて淡々とした日常のリズムを刻む材料が必要だった。

この井伊家の日常の円環性と対決する

のが、浪人・津雲半四郎の日常の円環性である。

すでに述べたように、半四郎が現れたとき家老・勘解由は「また来おったか」と呟く。この「また」とは、半四郎の娘美穂の夫千々岩求^{もとめ}女のことを指している。求女は半四郎の親友の息子であり、やはり福島家改易後、浪人となっていた。手習い塾をひらき糊口を凌いでいたが、妻は肺を病み、内職の無理がたたり病床に伏す。そして息子・金吾が高熱を發し、金が必要となった。

求女は半四郎に「遅くとも夕刻までには必ず」と言い残して日本橋に金策に走る……。これは方便で井伊家上屋敷に向かう。そこで切腹を申し出、仕官できればよし、でなくとも厄介払いの金をもらう算段。そして帰宅すれば、この日常の円環は閉じるはずだった。

半四郎は一刻千秋の思いで待つが求女は帰らない。いや、夜帰ってくる。骸となつて井伊家中に運ばれて。求女は「望

みどおり」切腹させられた。求女の差し料の刀身は売り払い、大小ともに竹光であつた。求女は竹光を腹に突き立て悶絶し、死にきれず舌を嚙んで果てる。

半四郎の日常の円環は永遠に閉じるこ
とがなくなつた。全てを失つた半四郎は、
復讐するは我にあり、井伊家上屋敷の門
前に立つ。そしてドラマが始まる。

覚書は次のように締め括られている。

「元福島家浪人・津雲半四郎、酉の刻に
至り屠腹絶命す。彼言動にやや不審の点
あり、精神錯乱の兆しありと見届けたる
者多し。なお本年一月、同じ福島家浪人
・千々岩求女なる者の屠腹あるも、その
処置を誤らず井伊家の武勇江戸中に響
く。この度も同様、その果断なる処置、
二日を経ずして府内一般に響き渡る……

治に居て乱を忘れず。此心懸けある限り、

井伊家の御家運益々ご隆盛ならんと。寛

永庚午七年五月十六日」(③)

※ ※ ※

「仮借のない幕府の政略のため、罪無く

して主家を亡ぼされ、奈落の底に喘ぎ、
蠢いている浪人者の悲哀など、衣食に憂
いのない人には所詮わからん！」と、半
四郎が彦根藩家老の勘解由に言い放つ場
面がある。いったい、これは江戸時代の
映画なのかという思いが込み上げる。
彦根藩といえば幕藩体制という盤石の
エスタブリッシュメントに載っている大
藩。いまでいえば一部上場大企業。それ
に対する浪人は失業者である。

戦乱がしずまり、パクス・トクガワー
ナⅡ平時となるが、仕官先を失つた浪人
一家の日常は破綻した。一方、井伊家の
日常は一旦みだれるが、覚書①↓③とい
うように、②を飛ばしてやがて何事もな
かつたかのように常態に回帰する。

※ ※ ※

専制政治は恐怖や不安のうえに成立す
るらしい。それはあからさまな暴力・脅
迫というかたちをとるとは限らない。平
時においても、リストラや失業の不安・
恐怖があり、また正規雇用には就けない不

安定さなどもある。半四郎と求女の不安
・恐怖はいまもある。非正規雇用の増
大や雇用止めの問題が深刻化している。
専制政治はこの不安や恐怖を利用する。

この春放送されたNHKの『事件の
涙』というシリーズ番組のひとつで、
非常勤講師雇い止めをきっかけに、九
州大学のODが放火自殺したドキュメ
ンタリーがあつた。反響が大きく再放
送された。自分の身を振り返つて、と
ても他人事のようにには思えない。職に
つけない不安、金がなくなる恐怖……。

それから間もなく『朝日新聞』で「文
系の博士課程「進むと破滅」ある女性
研究者の自死」という報道を目にした。
私は名刺を捜した。あつた。この研究
会にも何度か出席していた西村玲さん
のものである。近世仏教論を中心に多
数の業績があつた。「家族と安定」を求
めての自殺だったという……。これが
『切腹』を見直して、日常性を考えて
みた所以である。合掌。(小川記)